



趙清閣が描いた子供時代の自画像。

## 子供時代

私の子供時代は三つに分けられる。第一時代は黄金時代で、母の胸の中で過ごした短い五年間。第二時代は母が亡くなった後に祖母に養育してもらった約三年間。そして第三時代は継母が来てから十五歳になるまでのあいだで、私はこの年月を自分の子供時代だと定めた。

第一時代が、一生のうちで最も幸せで完全な時代だった。この世に生まれ出てすぐに、私は短い楽しい夢を見たのだ。

第二時代になって私は人生の歴史の悲しみのページをめくりはじめた。母から置いていかれたことが、私の魂を永遠に孤独なものにした。

第三時代、継母が来た八歳から十五歳までの七年のあいだに、私の中には人生に対する悲観的な見方が芽生えた。何を見ても悲しくなりいつも母親を恋しがった。特に継母が子供を生むと、私は赤ん坊のことを羨ましく思った。この時期、私は気も狂わんばかりに母を恋しがった。幸いなことに祖母は母と変わらないほど私を可愛がってくれ、私は勉強に没頭しながら悲しみの中で子供時代を過ごした。

子供時代、私には三人の遊び友達がいた。その中で最も仲が良かったのが母方のいとこの蓉(ロン)兄さんで三歳年上だった。二人目の遊び友達は私と同じ年齢の三番目の従妹で、三人目はいとこ中ではいちばん年下の四番目の従妹だった。

母が亡くなったとき私は五歳になったばかりで、蓉兄さんは八歳になっていた。彼はずっと私のことを好きだったので、母親を失ったとき最も同情してくれたのは彼で、最も私を慰めることができたのも彼だった。彼はよく私といっしょに涙を流してくれた。

三番目のいとこはいつも私をいじめていたので、蓉兄さんは怒って彼女をよく叩いたが、ときにはそれでおばさんから叱られたりしていた。彼女はとても甘やかされていた。一人娘だったので、母方の祖母とそのほかの者も彼女をとってもかわいがって甘やかしていたのだ。彼女は小柄だった。大人の前ではいい子ぶって歓心を買っていたが裏では悪いことをする性

格だったので、二番目の従姉は彼女を嫌って「小妖婦」というあだ名をつけていた。蓉兄さんと私も彼女のことが好きではなかった。

蓉兄さんと四番目の従妹は兄妹だった。蓉兄さんが生まれる前、彼はとても滑稽な方法で婚約させられていた。叔父がある日、仲のいい友人と話しているとき、二人の妻の妊娠の話が出た。友人が自分の妻はすでに千金(女の子)を産んでいる。叔父がもしも男の子を持ったら、彼らを結婚させることができる、というのだ。

この話は叔母が蓉兄さんを生んだとき実現された。つまり「指腹為婚(胎内にいる内に婚約させること)」が事実になったのだ。

私が七歳、蓉兄さんが十歳のとき私たちは一緒に遊びはじめ、三年以上親しい友人として過ごしていた。私の母は生前、私たち二人をととてもかわいがってくれたので、私たちは互いの呼び方から「表(いとこの意味を表す)」の字を省き、実の兄妹のように「蓉兄さん」「英妹(趙清閣の愛称)」と呼び合っていた。

私たちはいっしょに塾で勉強していた。蓉兄さんはすでに『詩経』の勉強に入っていて、私と三番目の従妹はちょうど「子曰学而時学之」を勉強しているところだった。毎日先生が帰ると蓉兄さんが私たちの先生になって、字の書き方を教えたり本を暗唱させたりした。できない者はだれでも同じように板でたたかれた。

勉強時間が終わるとやっと遊ぶことができた。遊びの種類は多く、ときどき「薬売り」をした。壁のレンガの合わせ目から細かい粉を掘り出し粉薬にして、小さな瓶の中に入れる。誰が掘ったのが良い品質かを競うのだが、細い粒ほど良いとされる。私はいつも瓦のかげらを使って新しいレンガをこすって粉にして集めた。こうするとかなりいいものが採れた。

もしも私たちがナイフで手を切ったり小さな傷を付けたりしたときは、自分で配合したこの粉薬を塗った。それが効くかどうかに関わらず、歯を食いしばって痛みを耐え、蓉兄さんのところに治療に行く。意外にも時には血が止まったこともあるが、結局は痛みを抑えることはできなかった。

このような遊びをしたために何回大人たちに叱られたことだろう。壁の至るところに私たちが掘った穴ができたので、放っておくと壁が崩れるかもしれないと彼らが思ったからだ。きつい禁止命令を食らって以来、私たちはもうこの遊びをしなくなった。

小さな人形や小さな服をつくるのは男の子の遊びではない。酒宴を用意して客を招くのや小さな家を作るのが蓉兄さんの好きな遊びだった。

酒宴を用意するお金はそれぞれが分担し、百錢あれば豪華にできた。場所はそのときどきで私の家になったり蓉兄さんの家になったり三番目のいとこの家になったりする。客を呼ぶためにいつも主人の蓉兄さんが招待状を書き、自らそれぞれの客に渡しに行く。客は席に着く前やご飯を食べてから、お辞儀をして礼を言い、お別れのあいさつをしなければならない。

小さな家は、だいたい私の家の裏庭で作られた。そこには木や草花、割れた瓦やレンガがあり、私と蓉兄さんもそこにいるのがいちばん楽しかったからだ。

割れた瓦やレンガを探すのは私の仕事で、蓉兄さんは建築を任せられた。家ができると私が作った小さな人形を住ませた。蓉兄さんは玄関に草花を置いた。家の落成の日には二人で「労働の歌」を合唱してお祝いをした。

裏庭は私たちの遊び場所で、特に私と蓉兄さんはここにいる時間が多かった。春には花を植え、水をやり、花をながめた。秋には落葉を掃除して木の枝を拾い、蟋蟀（こおろぎ）を捕えた。夏には涼み、冬には雪だるまを作った……私たちは食事をするのも忘れて、このようなさまざまな遊びに精を出した。

蓉兄さんはいろいろな点で私に譲歩し私に従い、私とは気が合った。しかし三番目のいとこに対しては情け容赦なかった。

ある冬の日の朝、太陽が出てすぐ、蓉兄さんは彼女と自分の妹（四番目の従妹）をつれて私を誘いに来た。母方の祖母の家の入口あたりで、何があったかわからないが彼女が蓉兄さんを怒らせた。私たちは母屋の軒先で雪が融けて落ちてくるのを見ていたが、突然「わあー」という声が聞こえてきた。彼女が雪に覆われていた大きな甕の中に落ちたのだ。急いで登って行って下を見ると、彼女の体は雪に埋もれ、頭だけが外に出ていた。

蓉兄さんは得意げに腕を組んでにっこりしていた。四番目の従妹がびっくりしてすぐに母親に知らせに行った。叔母さんは大慌てで走り出てきて、お手伝いの楊おばさんに言って、彼女を家に送り届けさせた。叔母さんは蓉兄さんを見つけて叱り、蓉兄さんの頭を力いっぱいたたいた。もう一度手を挙げてたたこうとしたとき、蓉兄さんはすばやく走り去り姿を消した。

蓉兄さんは三番目のいとこの両足のあいだに手や足を入れてひっくり返すといういたずらもよくしていた。彼女は体が小さかったのですぐに地面に倒れてしまい、それで彼女の母親は、蓉兄さんとは遊ばないようにと再三警告するのだが、何と言っても子供は子供、半日もたたないうちにすっかり忘れ、また蓉兄さんを探しては遊ぶのだった。

私が八歳のときの春、叔父さんが湖北孝感県の県長に赴任することになったので、叔母さんと蓉兄さんたちは行ってしまった。出発する前、蓉兄さんが手紙を書いてよこした。

英妹へ

明日、私はお母さんと湖北に行きます。行きたくはありません。でも行かないわけにはいきません！何かいい方法がありますか？ 蓉兄より

手紙を読むと私は思わず涙を流してしまった。そして返事を書こうとしていたそのとき、何と彼が走ってやってきた。私が泣いているのを見て何も言わなかった。しばらくして私に聞いた。

「英妹、湖北に来ないかい？」

私は急いで頭を振った。

「だめ。お母さんがもし生きていたら、できたかもしれないけど！」

こう言うのは私にはとてもつらいことだった。彼も泣きじゃくりはじめた。祖母が何とか私たちをなだめる方法を考えてくれた。彼女は私たちの涙をかわるがわる拭きながら怖いお話を聞かせてくれた。夜遅くなり、叔母さんの家から迎えの人がやってきて、蓉兄さんを連れていった。祖母は彼を頭をなでながら言った。

「泣くことはないよ、すぐにまた会えるから。それに、湖北に行ってもいつも英妹に手紙を

書けるじゃないかい。」

「ぼくが行っちゃったら、遊び友達はどうするの？」

私は首を横に振った。

「いないけど、みんなと遊んでも楽しくないからいいの。」

蓉兄さんはそれを聞くと元気になって、迎えにきた人と一緒に家に帰っていった。このとき、恐ろしいほどの寂しさに襲われ、私は祖母の胸に抱き着いて泣きはじめた。これは、私が初めて感じた、この世の中の別離の苦しみだったのだ！

これ以後は祖母が遊び友達になってくれ、ほかの子供たちの群れに入ることはなかった。毎晩彼女はお話を聞かせてくれた。時には紙牌(チーパイ)①をして遊んだ。またある時はベッドの上でおもちゃ競技会を開き、祖母も参加した。オルガンを弾いて歌を聞かせ、「のぞきからくり」を見せてやった。銅鑼(どら)や太鼓をたたき、ラッパを吹いて音楽を演奏した。時には宴会を用意して、祖母が客になり私が主人になった。彼女は買い物をするためのお金を出して私に手渡さなければならなかった。

毎日授業が終わって家に帰ると、勉強したことを祖母に教えた。ああ！私はこの時、自分のすべての魂を祖母に託していたのだ。彼女は一度も私を大きな声で怒鳴ったことがなく、どこにでも私といっしょについてきた。どこから家に帰ってきて私を呼んでも私はまず彼女のことを大声で呼んだ。もしも彼女からの返事が聞こえなかったら、私は声を上げて泣き出した。私はもう片時も彼女から離れることができなくなっていたからだ！

夜、私たちは一枚の掛け布団をかぶっていっしょに寝た。そして眠りにつくまで祖母の手を握っていた。それは祖母が話してくれたお話しの中の神仙や妖怪、トラや大猫が怖かったのと、もう一つは、彼女が私のそばから離れていくのが怖かったからだ。

その翌年の夏のことを私は覚えている。ある日の朝早く、突然家の表門が大きな音を立てはじめた。祖母は驚いて目を覚まし、急いで門を開けるようにとお手伝いの陶おばさんに声をかけた。それからひとしきり「英妹！」という叫び声が家の母屋にまで伝わってきた。ああ、蓉兄さんが帰って来たのだ。

このとき私はまだ布団の中にいたのだが、彼はそんなことはおかまいなく、ベッドに登って私を布団の中から引っ張り出した。

「英妹、さっき汽車から降りたばかりなんだよ。早く起きて。面白いものをいっぱい買ってきたから。まだ母さんの荷物の中に入ってる。」

彼はそう言いながら私に服を手渡し、私が着替えを終わると顔を洗わせ、準備万端整え、さあ行こうというときに、母方の祖母の家から迎えの人が来た。彼は祖母に会う前に私に会いに走ってきたのだ。

私たちがいっしょに母方の祖母の家に着くと、叔母さんはおかしそうに言った。

「蓉は本当に英ちゃんと仲がいいのね。汽車を下りてすぐに、おばあさんに顔を見せる前に走って会いにいったのよ」

叔母さんの話にみんなは大笑いして、祖母は私たちの頭を愛しそうになでてくれた。私たちは誇らしく顔を見合わせて、手をつないで出ていった。

蓉兄はここでやっと、自分が持ってきたものを私に手渡した。小さなブリキの拳銃、絵はがきを見る虫めがね、それにまだいくつかの小さい品々。最も私が気に入ったのは虫めがねだった。今も大事に、それを持っている。

長い別れのあとでの再会で、二人は、自分たちが前よりもいっそう仲良しになったように感じた。無邪気な神聖な、清らかな友情が私達の魂を占めた。

蓉兄さんの家の裏庭の書斎の前に一本のバショウの木があって、そこに私たちはよく集まった。多分彼が一年成長したせいなのかもしれないが、昔のような遊びはせずに、いつも話をしてくれたり、歌を歌ったり、字を書くことが多くなった。彼の家にはオルガンがあって、彼がオルガンを弾き、私はだいたいいつも『スズメと子供』を歌った。

蓉兄さんいつでもどこにいても、どんな辛いことをしてでも私を大事にしてくれた。ご飯を食べるときはおいしいところを選んでたくさん私の前にとり分けてくれた。歩くときも手をつないでくれた。自分が母親に外出を禁止されたりして半日も会えないようなときには、手紙を書いて妹に届けさせ、あやまった。いっしょに遊ぶときには、私も彼のことをとても大事にした。

しかし、そんな彼でも私を怒らせるときもあり、そんなときはいつものようにあやまりに来て、自分が悪かった、と認め、それで解決していた。

その年の冬のある日、昼ごろに起こったことをよく覚えている。午前の授業が終わって家に帰ってくると、ズボンに穴が空いているのがわかった。祖母に繕ってもらっているとき蓉兄さんがやってきた。彼は丈の長いきれいな中国服に黒い短いチョッキを着ていた。口にはたばこをくわえ得意げに私に言った。

「英妹、たばこ吸うかい？」

私を取り合わないでいると、彼は私の虫の居所が悪いのだと思い、つまらなさそうに祖母のところに行った。「これ何？」

彼は祖母が持っているズボンを指さして、からかうような口ぶりで私に聞いた。

「ズボンよ！」と私は答えた。

「帽子かい？」

彼は、このようなことを言って自分が笑われ、そうすることによって私が愉快になるだろうと考えたのだが、結果は反対だった。私を怒らせてしまったのだ。

「人のことをばかにして！」

私は怒って部屋の奥に入り、声を上げて泣いた。彼は私に許しを求めに来たが無視した。

「英、蓉兄さんはもうあやまったでしょう。怒らないで！」

祖母は優しい口調で私をなだめた。

「あやまったってだめ！」

私はずっと泣きじゃくっていたが、蓉兄さんもこの時、目をこすりながらこっそりと離れていった。

「蓉兄さんは泣いて帰っていったよ、早くズボンをはきなさい、英！」

「もういい、このズボンは穿かない。」と言うと、私は怒ってかばんを背負ってご飯も食べずに学校へ行った。祖母が後ろから呼んだが私はもう門を走り出て通りに出ていた。遠くか

らずっと祖母の呼び声が聞こえていた。

学校に着いても私は教室の中で寒さに両足を震わせていた。同級生たちが私を遊びに誘ったが出ていかなかった。都合の悪いことに、体育の授業で宋先生（宋先生は蔣光慈②夫人で、当時は第二女子師範学校の教師で体育と音楽を教えていた）が、私を徒競走に参加させることにした。他の生徒はすべて短い裏付きの上着と綿入れのズボンを穿いているのだが、私はいつも男の子が着る丈の長い中国服を着ていたので、走るのには都合が悪かった。これを脱ぐと下はパンツを穿いているだけだった。

「徒競走ができるように早く服を脱ぎなさい！」宋先生が命じた。

「私は……私はお休みします」私はおそるおそる言った。

同級生たちがざわざわとして大声を上げた。

「だめよ、級長がわけもなく休んだら、私たちだってみんな休みを取るわよ。」

「わあーん」と私は声を上げて泣きだした。宋先生は驚いてどうしたのかとなだめながら聞いた。先生は私のことを気に入ってかわいがってくれていたのに、自分がいじめたのではないかと思って驚いたのだ。私は綿入れのズボンをはいていない理由を小さな声で言うと、彼女は笑いだし、すぐに私を家に送っていかせた。

家に着くと祖母が急いで私にズボンを着せてくれた。そして「もうわがまま言っちゃだめだよ」と、優しく私を叱った。

翌日の早朝、蓉兄さんは自分で手紙を持ってきて私に手渡し、戻っていった。

英妹へ

私はもうこれからはあなたをいじめません。どうか許してください。私は一晩泣きました。だれに慰められても泣き止むことができませんでした。今日、私と遊びたくないですか？ 私はとてもきれいな西洋の絵はがきを持っているので、見せてあげます。

蓉兄より

この手紙を受け取って私はすぐ返事を書いた。そして自分で持って行って四番目の従妹に、兄さんに渡してちょうだい、と言って手渡した。

蓉兄さんへ

もう私もいじめないと言っていますが、本当ですか？ あなたが誓うなら私は信じます。今晚、私の家に、西洋の絵はがきを持って来てください。

英妹より

夜になって蓉兄さんがやってきた。案の定、彼は神妙な顔つきをしていて、もし自分がまた私をいじめたりしたら、自分は人間ではなくて犬畜生だ。と言った。そして私に、たばこの箱に付いている絵のカードをたくさんくれて、「まだ怒ってるのかい？」と聞いた。

私は笑いながら、いいえという風に頭を振った。祖母は手を叩いて「これからはもうけんかなんかしちゃだめだよ」と言った。

実際に、それからはけんかをしたことがなく、蓉兄さんは前よりもずっと私に優しく接し

てくれるようになった。このような生活が半年続いたとき、叔父さんがこんどは黄岡県に転勤になった。蓉兄さんと二回目の別れをすることになるろうとは思ってもいなかった。

別れの日、私たちは二人とも涙を流した。彼はまた聞いた。

「いっしょに行こうよ」

私の返答も同じだった。

「お母さんがいてくれたら」

別れたあと、私たちはひんぱんに手紙のやりとりをした。彼は私に雑誌『小朋友(小さな友達)』を何度も送ってくれた。

二年後、私は十一歳になった。学校では五年生の授業を受けていて、いつも跳び級で上がっていた。夏、私は師範学校に合格した。胡校長が、掲示板を抱えていたのを覚えている。私の名前はその中にあった。だが規定の年齢より下だったので不合格になり、進学することはできなかった。その年、蓉兄さんは帰って来なかった。私は大病を患い学業にも遅れが出た。

秋になって私が学校で勉強していたとき祖母がまた病気で寝こんでしまい、危険な状態に陥った。何回泣いたことだろう。学校には行きたくなかった。いつとも祖母のベッドから離れず、毎日裏庭の花壇に行って一人でいっしょうけんめいに祈った。何度も頭を地面に打ち付け、どうか祖母を治してくださいと神に祈った。

やっと祖母は回復した。これはひょっとしたら私の懸命な祈りに神が感動して靈験を現わしてくれたのではないかと思った。

十二歳と十三歳、この二年間は最も寂しい年だったと言える。私もだんだん世の中の有為転変がわかるようになっていた。私は女子師範学校の二回目の試験に合格したが父の頑固な反対で進学することができなかった。それでよく母のことを思い出した。何度も長い道のりを歩いて田舎の母の墓参りをし、苦しみを泣いて訴えた。墓参りから帰って来るたびに病気になり、心の深いところでは憂いと煩惱が増していった。

十三歳の冬、北伐戦争③の砲火が私の家を破壊した。翌年の正月にやっと停戦が宣告された。(これに関して中編小説『砲畑』を書いた。)

祖母が健康を損なっていたことが依然として私を苦しめていた。私は、祖母にもしものことがあったら地の下まで追いかけていこう、絶対に一人では生きていきたくない、祖母がいなかったら生きていく必要がない、と感じていた。このころ私の気分は病的なほど落ち込んでいた。昼となく夜となく母を思い出し、祖母の体のことを心配した。夜が更けて人が寝静まったころ広い野原に行くと月の下、風雨の中ですすり泣いていた。

女子師範学校時代に芸(イ)姉さんと知り合った。[実際に進学したのは県立中高等学校の中学部。]芸姉さんは三歳年上でほっそりとして優しくて典型的な才女だった。彼女は学年も成績も私より上だった。私たちが仲良くなったのは文学的な趣味が一致していたからだ。当時私はクラスの壁新聞を編集していて、彼女もいつも文章を書いていた。芸姉さんは祖母や蓉兄さんと同じように私によくしてくれた。私が病気になったときは幾晩も寝ないで看病してくれたことを覚えている。

蓉兄さんとはそれからはずっと離れていた。手紙のやりとりはしていたものの、彼が自分

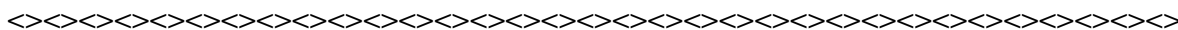
の結婚話に不満を持っていると後に書いてきたとき、私は何か悪いことを引き起こすかもしれないと思い、芸姉さんに頼んで、清閣はもう故郷を離れた、という内容の手紙を書いてもらい、それで文通も終わりになった。しかしあの清らかな友情があったおかげで、私は彼のことを、あの温厚で誠実な子供時代の相棒を懐かしく思い出すことができる。

一九三五年二月

①紙牌……中華圏の伝統的なゲーム用のカードの総称。一般的にトランプなどに比べて枚数が多く、幅の細いものが多い。

②蔣光慈（1901-1931）……小説家で最も早く革命文学を提唱した人物。旧ソ連に留学したあと上海大学教授になる。

③北伐戦争……1926年から28年にかけて第一次国共合作のもと、国民政府によって起こされた国民革命軍（北伐軍）による地方軍閥を打倒する戦い。10万人の軍隊を持つ北伐軍は各地で軍閥軍を撃破、武漢、武昌、福州、杭州、南京を落とし27年3月には上海に達した。北伐に呼応して各地で民衆蜂起も起こったが、社会主義への傾斜を怖れた蒋介石が共産党勢力を排除したことにより、第一次国共合作は崩壊した。



（中国語原文）

## 童 年

童年，我的童年可以分作三个时期，第一个时期，即所谓“黄金时代”——那是在母亲的怀抱中度过去的短短五年；母亲死后，乃是跟着祖母生活的一个时期，大约有三年光明；到第三个时期，是继母来后的数载，我把这童年的阶段，定为十五岁止。

第一个时期，不用说是我一生中最幸福，最美满的时期；从降生到这个世界上来，我就只作了这样一个短短的快乐的梦；至第二个时期，我便开始了生命史上悲痛之页，母亲的遗弃永远造成我孤独的灵魂；第三个时期，是继母来了以后，由八岁至十五岁这个七年中间，即我对人生抱悲观的萌芽。

因为处处都触景伤情，所以时时都想念母亲。尤其继母生了孩子，更使我增加羡慕母爱的伟大，在这时期，差不多我想念到发了狂。幸喜祖母的爱护无异于慈母，同时一面又在求学，于是才在凄楚沉痛中度过了童年。

童年时代，我有三个玩伴（即小朋友），其中最要好的是蓉表哥，他比我大三岁。一个三表妹，跟我一样大。一个四表妹，她最小。

母亲死时我才五岁，蓉表哥已经八岁了，他一直很喜欢我，所以在我失母期间，他算是最同情我，最能安慰我的一个人，他常常陪着我流眼泪。

为了三表妹常欺侮我，蓉表哥也不知打了多少次的抱不平，而且有时还会累得他受气挨骂。因为三表妹很娇养，四舅母半生就只这一个女儿，外祖母和其余人们也都很疼爱她，因此便把她捧了起来。

她生得小巧，有点儿鬼头鬼脑的样子，会在大人面前逞能献殷勤，所以二表姐讨厌她，



替她取个绰号叫“小妖精”，蓉表哥和我也不喜欢地。

蓉表哥和四表妹是大舅母生的，蓉表哥在还未降世以前，就被舅父替他订了婚，那是很滑稽的办法——舅父有一天和他的好朋友谈心，互相问起两方夫人怀孕的事，那位朋友说：他的夫人已经生下一位千金，舅父如果生下一位公子的话，他们可以结为姻亲。

这话终于实现了，当舅母生下蓉表哥以后，“指腹为婚”便成为事实。

我七岁，蓉表哥十岁的时候，我们已经在一起玩了，是三年多的好友了。母亲生前看见我们特别亲爱，于是在我们的称呼上把“表”字取消，从此便同胞似的“蓉哥”“英妹”地喊起来。

我们在一块读书(家塾)，蓉哥已经读到《诗经》，我和三表妹还刚在读“子曰学而时习之”。

每天先生走了，蓉哥又作我们的先生，他教我们写字，背书，谁不会也是一样的挨板子。

放了学我们才可以玩耍，玩耍的花样很多，有时“卖药面”，把墙壁上砖头缝里的灰挖出来当药面，再装到小瓶里。看谁挖的好，以最细碎为最好；我便常常用瓦片在新砖上磨擦，这样的成绩是比较最好的了。

如果我们真的手上被刀子割破或小受创伤，便用这自己配的灰药抹上去，不管它有效没效，都咬牙忍痛地让蓉哥去医治，有时候也竟会止住流的血，但疼痛终是止不住的。

为了这种玩法，不知被大人们骂过多少次，因为到处的墙壁都被我们挖出空洞，大人们恐怕影响到墙倒屋塌，所以命令禁止，我们也就从此不再玩这个了。

做小人，小衣服，这都不是男孩子们玩的。备酒宴请客和建筑小屋，这是蓉哥喜欢的。

备酒宴的资本是由各人分摊，常常一百钱就办得很丰富。地址有时在我家里，有时在蓉哥家里，有时在三表妹家里。邀客的方法常是蓉哥写好帖子，再由主人自己送给每个客人。客人没有不到席的，吃罢饭还要鞠躬打谢的辞别。

建筑小屋多是在我家的后花园里；因为那儿有树木，花草，碎瓦，碎砖，而且我和蓉哥也最欢喜这地方。

找碎砖碎瓦是我的工作，蓉哥专管建筑。盖好了的房子，让我做的小人去住，蓉哥又在门口栽上树木花草，落成之日，我们两人合唱《劳动歌》表示庆祝。

后花园成为我们的游戏场所，尤其我和蓉哥两人在这儿的时候多。春天里种花，浇花，看花；秋天里扫落叶，拾树枝，捉蟋蟀；夏天里乘凉；冬天里堆雪人……这种种常使我们玩到忘记了吃饭。

蓉哥处处都迁就我，服从我，从不和我闹一点别扭；然而对于三表妹，他是向不通容的。

记得在一个冬天的早上，太阳刚出来，蓉哥带了三表妹和四表妹来约我到他们家。走到门口，不知为了什么一点小事，三表妹惹了蓉哥。及至到家，我们正在外祖母的堂屋门前看房檐的化雪滴水，忽然听见一声“唉哟”，三表妹掉到雪缸里了，我连忙爬着缸口向下望，三表妹的身子已全被淹住，只剩一个头在外面。

蓉哥却得意地在一边抱臂微笑，四表妹吓得立刻去告诉大舅母(蓉哥和四表妹的母亲)。大舅母慌慌张张跑出来，叫杨妈把三表妹抱起送到前院四舅母家。四舅母找到后院来骂

蓉哥，气得大舅母用力在蓉哥头上打了一巴掌，举手打第二巴掌时，蓉哥已经逃得无踪迹了。

平常，蓉哥也是不断给三表妹“吃鳖子”，（就是在她不知不觉中，用右腿伸向她两腿间拌鳖一下）让她摔筋斗。因为三表妹身体倏小，所以蓉表哥一动手，或一伸腿，她就立刻倒地，为了这，四舅母屡次告戒三表妹不要和蓉哥玩，但是小孩终究是小孩，记不到半天工夫，她又找着蓉哥玩了。

八岁这年的春天，大舅父到湖北孝感县作县长，大舅母和蓉哥都要去上任了，在动身头一天，蓉哥自己先送来一封信，上面写着：

“英妹，

明天，我就要跟妈妈到湖北了，我真不愿去，可是又不能不去，好妹妹！

你可有办法吗？

蓉哥上”

信看罢，我不禁流下眼泪，正预备回他信，他却又很快地跑来了，他看见我在哭，没有说话，过了一会才问我：

“英妹，你也去湖北好吗？”

我连忙摇摇头。

“不行，我娘要是活着就可以了！”

说罢这话我更难过了，他也不住抽泣起来。幸喜祖母想法子安慰了我们，她一面替我们揩眼泪，一面讲些可怕的故事给我们听。直至天晚了，外祖母派人来接蓉哥回去，祖母又抚摩着他说：

“不要哭，不久你们就又见面了，到湖北可以常常给你英妹写信。”

蓉哥点点头，拉了我走到门外。

“我走了以后，你还有玩伴吗？”

我立刻摇首。

“不，我不高兴再和他们玩了。”

蓉哥于是快活地跟着差役回去。这时，一阵寂寞的恐慌袭来，我又伏在祖母的怀里哭了。这是我第一次感到人间别离之苦！

从此，祖母便成为我的大玩伴了，别的孩子群我不去参加。每天晚上她给我讲故事，有时和我抹纸牌对子玩。还有时我在床上开玩具大会，祖母也陪我举行玩具会的比赛。或则我弹风琴唱歌给她听，“拉洋片”给她看。还打锣鼓，吹洋号奏成了音乐。有时我备宴请客，她当客人，我当主人，她得拿出钱来给我买东西。

每天我放学回家，将读过的书再教给祖母，呵！我这时的全幅心灵都寄托在祖母身上了，她从未责骂过我，她处处依从我。我无论自什么地方回家，第一声总先喊她，饭如这一声她不答应我就会哭起来，因为我已经寸步不能离开她了！

夜间睡觉，我们都是睡在一个被子里，而且要拉着祖母的手，直至入梦。这一面是为了害怕她所讲的故事中的神怪，老虎，大猫；一面也是惟恐她要离开我似的。

第二年的夏天，记得是一个早晨，突然我们家的大门响起来。祖母从梦中惊醒，连忙唤陶妈去开门，接着是一阵的“英妹”呼声传到堂屋，呵，蓉哥回来了。

这时我还在被子里，他不问三七二十一爬上床把我从被子里拖了出来。

“英妹，我们刚才下火车，我就来了，快起来到我家去，我给你买了很多好玩东西，还在妈的箱子里放着。”

他边说边递给我衣服，我穿好以后，洗罢脸正预备一快走，外祖母已派人来接了，原来他连外祖母还没有见面，就跑来看我了。

我们一块到了外祖母家，大舅母见了我很快活地说：

“蓉儿真是对小英好，下了火车连奶奶也不见就跑去看他的英妹了。”

大舅母的话说得大家都笑了，外祖母疼爱地抚摩着我们。我们骄傲地相向望了望，于是又携了手走出来。

蓉哥这才将他送我的几件玩具交给我，一只小洋铁手枪，一个看画片的放大镜盒，还有一些小东西。最使我喜爱的，要算那个放大镜盒，这东西到现在我还保存着。

久别重聚，在天真的童心里。更感到亲热了，一种无邪的圣洁友情，占有了我们的心灵。

蓉哥家的后院书房目前一株芭蕉下面，是我们经常聚会的地方。也许为着他长大了一岁的原故，已不像从前那样爱玩了，总是讲故事唱歌和写字的时候多。他家也有一架风琴，老是他弹琴我唱《麻雀与小孩》。

无论在什么时候，什么地方，他都是委屈求全地体贴我。吃饭，他会给我挟许多好菜；走路，他携着我。从没有隔过半天不见面，饭如这一天他被大舅母禁止出去了，那末他便写信叫四表妹送给我；或去替他讲情，或去陪他玩，我也是很能体贴他的。

但是，他也有得罪我的时候，得罪了我，仍是他来赔罪，承从是他的错，才算了结。记得这年冬天的一个中午，我放学回家，裤子被跌破了一个洞，正在请祖母补缝，蓉哥来了，他穿着一件很漂亮的长袍，黑马褂，嘴里还衔着一枝香烟，得意地告诉我，

“英妹，你要吸烟吗？”

我不理他，他知道我在不高兴，无聊地走到祖母面前。

“这是什么？”他指着祖母手里拿的裤子，用打趣的口气问我。

“裤子！”我说。

“帽子？”

他希企用这样的取笑，可以使我快活，但是相反地却惹火了我。

“你骂人！”我说罢就生气地跑到房里哭了，他来向我求饶，我不睬他。

“英，蓉哥向你赔了不是，就不要再生气了！”祖母用慈祥的口吻劝我。

“谁稀罕他赔不是！”

我仍然抽泣不止，蓉哥这时候揉着眼睛，悄悄地离开了我。

“蓉哥哭着回去了，快来穿裤子吧，英！”祖母说。

“不，我不再穿这条裤子了。”我说罢，忿忿地背了书包连饭也不吃就去上学。祖母在后面喊着，我已跑到门外街中心了；老远还听见祖母的喊声。

到了学校，我坐在教室里两条腿又发抖，同学们叫我出去玩，我也不出去。到上体育课的时候，偏偏宋先生（宋先生即蒋光慈的夫人，纪念碑的女主人，那时候她在二女师教

我们体育和音乐。)要我参加赛跑。别人都是穿着短袄,棉裤;只有我,因为一向是男孩子打扮,穿了件长袍,跑起来既不便当,脱了吧,下面又是穿着一条单裤。

“快把长袍脱了好赛跑呀!”宋先生命令道。

“我……我请饭。”我胆怯地说。

同学们一阵嚷起来。

“不行,级长(即一级之领袖。)要无故请饭,我们大家都请饭。”

“哇”地一声我哭了,宋先生惊奇地走来慰问我,平时因为她最喜欢我,所以也就不忍再难为我。我把没有穿棉裤的原因用小声告诉她,她笑了,立即派人把我送回去。

到家祖母连忙给我穿上了棉裤。

“小孩子,以后不要再任性。”祖母温和地责备我。

我撅着嘴不理她,无声地吃罢晚饭,一个人补习功课。

第二天一早蓉哥自己送来一封信,上面写着:

“英妹:

我以后再不欺侮你了,请你原谅我过一次。在家里我哭了一晚上,谁劝劝我也不中。你今天愿意跟我玩吗?我有很好的洋画片给你看。蓉哥上”

接到这信,我便写了封回信,也是自己送去交给了四表妹收转。我的信是这样写的:

“蓉哥:

你说以后不再欺侮我了,是真的吗?你要赌咒我才相信,今天晚上你来我家,把洋画片带来。英妹”

到了晚上,蓉哥来了,他果然向我赌了咒,他说他若再欺侮我,他便不是人,是狗。他又送了很多香烟里附带的画片,他说,“你还生气吗?”

我笑着摇摇头,祖母拍拍手说:“从此可不要再吵架了!”

真的,从此我们再没有闹过气,而且他更是无微不至她待我好了。这生活继续了半年,谁知大舅父又要上任黄冈县,我和蓉哥,便又第二次的离别。

离别的这一天,我们都流了很多的眼泪,他仍然问我:

“你跟我一块去好吗?”

我的答复也仍然是:

“可惜娘死了。”

离别以后,我们通了不少信,他给我寄了很多《小朋友》。过了两年,我已经十一岁了,在学校读到五年级的功课,总是跳越升级。夏天,我还竟然考取了师范,记得还是胡校长抱着我看的榜。而且名次不落后,不过为了年龄不及格,未能升学。这年,蓉哥并没有回来,我因为生了一场大病,学业也耽误了。

秋季,刚刚读学,祖母又病倒了,简直危在旦夕。可怜我也不知哭了多少次,学校不愿去,时刻不离祖母的病榻,每天在后花园一个人虔诚她祈祷,叩了无数的迷信头,总希望神能够保佑祖母的安痊。

终于祖母好了,这也许是被我的虔诚感动,显了灵吧?!

十二岁,十三岁,这两年的生活要算最寂寞了,我也渐渐懂得了人事的沧桑。我第二次考取了女师,又被父亲的顽固阻止了升学。于是时常思想母亲。一年之中,总要跋涉长途到乡下母亲的墓坟前祭扫几次,为的是哭诉苦衷。每次从母亲坟前归来,都要生病,在心灵深处增加了愁苦和烦恼。

在十三岁的冬季,北伐战争的炮火毁了我的家。第二年元月才宣告停战。(关于这,我曾写过一篇《炮烟》的中篇小说。)

接着又为了祖母的不健康,磨难着我。我觉得祖母若有啥好歹,只有追随于地下,绝不愿单独地再活下去,没有祖母,也就没有再生活的必要。这时我已堕入病愁的深渊,无论日里夜里,我都深深思想母亲,忧念祖母的身体。常常夜深人静,在广旷的草场,或是月光下,或是风雨中,我总孤独地啜泣。

在女师时我认识了艺姊,艺姊比我大三岁,她就像林楚楚那种温柔,贤慧的典型。她在学校的班次及程度都高于我。我们的相爱,是由于文学旨趣相投的原故。那时候我主编班级的《壁报》,和文学结下不解缘。她也常写文章。艺姊待我好,无异于祖母和蓉哥,记得我在病中,她曾几夜不闭目地看护我。

和蓉哥一直隔离下去了,虽然也通过信,后来为了他谈到不满于他的包办婚姻,我怕引起是非,就托艺姊写信给他,告诉他我已不在故乡,因此,我们便连通信也断绝了。但是由于我和蓉哥的一段纯洁的友爱,我倒是常常怀念他。怀念这个忠厚诚挚的童年伙伴。

一九三五年二月

□□□□□